

聴いてわかる録音図書を作るために

録音図書の校正

久保 洋子

私たちが読んだ録音図書は一部の例外を除いて一校から多い時は五校、六校と校正をします。墨字の本の校正では原稿と違わないよう一字一字照会します。これに対して録音図書の校正には、目的が二つあると考えられます。

一つは勿論、原本の通り読まれているかどうかということ。もう一つは、同音異義語、括弧、その他の記号、図や表などを含めて、きいてわかるように読めているかをチェックすることです。

原本の通り読まれているかどうかのチェックは活字一字一字と音声を照合して行く作業です。誤読はこの作業で見つかります。しかし、聞いてわかる（私たちが活字の本を読んで理解するのと同じように理解できる）ように読めているかどうかは原本との照合でチェックするのは難しいと思います。

わかり易い例として同音異義語があります。

漢字の同音異義語は文字を見ればすぐわかるのに音にするとわからなくなるよい例です。校正者は文字を見ているから、うっかり見過して（聞き逃して）しまうことがあります。校正は原本を見ながらでなければできない作業です。でも、原本を見ていてはチェックし難いこともあるわけです。

利用者は声だけが頼りです。

内容がきちんと伝わる録音図書の製作には原本を見ないで録音図書を聞く経験をしてみる必要があるのではないのでしょうか？ 読み手も校正者も利用者の読書をもっと

理解する必要があると思います。

以下、いくつかのポイントを上げてみたいと思います。

(1) 粋アナウンス

録音図書のはじめの粋アナウンスは活字の本でいえば表紙、終りの粋は裏表紙だと思えます。

表紙、裏表紙が不完全な本は、売り物にはなりません。表紙が不完全だと中味までいい加減な物に思えてしまいます。

これは録音図書でも同じことです。

各巻A面B面の粋も同様きめられた通り各巻そろえて下さい。

読み手が気をつけるのは勿論ですが校正者も、きちんとチェックして下さい。

読む時も同じですが校正する時例えば

- ・最初の粋を聞いた時、製作年、全巻数は必ずメモしておきます。最終巻を聞いて不揃いであれば校正表に記入します。
- ・1巻B面の粋アナウンスをメモしておく。

2巻A面以降はこれに合わせて正しいかどうかチェックをする。

これで粋アナウンスの不統一はチェックすることができます。

つづく



Q マイスタジオPCを使ってパソコン録音を考えているのですが、ノートパソコンはどんなものでもよいのでしょうか。現在、推薦できるパソコンがあれば紹介してください。

A パソコン録音は、パソコンの機種だけでなく、マイクにもパソコンとの相性があります。ノートパソコンの場合、非常に小さいものや超薄型のものは雑音が発生して、うまく録音できないようです。（全ての機種で実験したわけではありませんが・・・）これはパソコンの音源ボードに問題があるようです。また、音源ボードがよくても、使用するマイクによっても雑音が発生したりしなかったりします。

現在、10万円までのノートパソコンであればDe11のノートパソコンは雑音の発生もすくなく録音にも向いているようです。(SOTECやFMV、Let's Note)などは雑音がよく発生しているようです。)

使用しているパソコンがどうしても雑音が発生するような場合は、オーディオ・キャプチャー(15,000円程度)を付ければ解決します。オーディオ・キャプチャーを付ければダイナミックマイクでも録音は可能になりますが、これを付けない場合は、パソコンで録音する時のマイクはパソコン用のマイク(1000円~2000円程度)かコンデンサーマイクでないと録音は無理(ダイナミックマイクでは録音音量が上がらない為)のようです。

『つかいこなせば豊かな日本語』

NHK放送文化研究所日本語プロジェクト より

問:「青空の下」は「モト」か「シタ」か

答:「下」という漢字は、名詞として「モト」とも読み、「シタ」とも読む。その場合に、「恒例の運動会が澄み渡った青空の下で行われた」などと用いるときの「下」は、「モト」と読むのが正しいか、「シタ」と読むのが正しいか、あるいは、どちらでもよいのか、という問題である。

結論を先に言えば、この場合は「青空のモト」と読むのが正しく、「青空のシタ」と読むのは誤りである。その理由は、「もと」と「した」それぞれの語の持つ意味から考えて、「もと」の方が、表現された内容に当てはまるからである。以下、その理由を明らかにするために、まず「した」の方から取り上げることにする。

この場合、「した」という語は「下」という漢字で書くが、その意味は、音読みで「上下・下段・下界」などと用いる「下」でもある。そこには基準点があって、それより低い方向のことである。逆に、高い方向が「上・うえ」である。すなわち、「うえ」と「した」を対比すると、「うえ」が高い方の位置であり、「した」が低い方の位置である。したがって、「青空」というのが「うえ」にあり、それより「した」の

ところで行われれば、「青空のシタ」となるのである。

しかし、この場合の表現内容は、たとえば言えば「青空」というのがドームのような天井であり、地上の方がその下にある、というような関係になる。そのような関係で「青空」をとらえれば、地上で行われたことに対して「青空のシタ」という言い方が成り立つが、実情は異なっている。一般的に言って、青空というのはどこまでも高く澄み渡っている大空のことである。そうだとすれば、地上で行われたことについて、青空を基準として「そのした」という連想は働かないのが普通である。

それならば「もと」の方はどういうときに用いる語か、ということである。この場合に、前述の「した」は「下」よりほかに書き表し方がないが、「もと」には「元・本・基・下」など、いろいろの書き表し方がある。そのうち、ここでは、「下」という漢字を「モト」と読む場合について考えることにする。「下」という漢字で表す「もと」の意味は、音読みで「脚下・部下・門下」などと用いる「下」である。それは、「上下」の関係で対応する「下」ではなく、「上に広がるものに隠れる範囲・影響を受ける範囲」の意味である。そうして、

そういう場合には、「下」を「モト」と読むことになる。例えば、次のような場合の「下」が「モト」である。

大木の下に集まる ろうそくの火の下で書く 白日の下に全身をさらす 教授の指導の下に研究を進める 法の下に平等である 正義の名の下に進む

このような場合には、「下」を「モト」と読むのが正しいわけである。

ところで、問題の「青空の下」というのは、実際にどのような場面になるのかということである。それは、澄み渡った青空が大きく広がる存在であり、そのような青空の影響を受けて、晴れ晴れとした気持ちで行われたことになる。そうして、「青空のモトで行われた」という表現は、正にこういう意味を表しているから、「青空の下」は「青空のモト」と読むのが正しいわけである。

それならば、「青空のシタ」という言い方は全く成り立たないかと言えば、そういうことはない。例えば、次の引用の「青空の下」には、「した」という振り仮名が見

られるからである。

・彼は青空の下、高い所を悠々舞つてみる鷺の姿を仰ぎ、人間の考えた飛行機の醜さを思つた。(志賀直哉「暗夜行路」)

これは、空高くトビが飛んでいるのを眺めた描写である。情景としては、上に青空があり、それを基準としてその下にトビが舞っているのを地上から眺めたことになる。こういう場合は、正に「した」なのである。

したがって、「青空の下」とあれば、その「下」は必ず「モト」と読むのだ、と決めてかかるのは誤りである。基本になる考え方は、表現された内容から見て、「下」という漢字を、どういうときに「シタ」と読み、どういうときに「モト」と読むべきか、ということである。それは、類義語としての「した」と「もと」の正しい使い分けに基づく読み分けを心得ておくことが必要なのである。

各種 講習会のお知らせ

専門音訳講座、「英語コース・パソコンコース」のご案内

専門音訳講座が下記の内容で実施されます。ボランティアグループには、実施要項も今号に同封しています。

1. 英語コース

実施時期

6月4日(金)～7月9日(金)

毎週金曜日午前10時00分～12時00分・全5回

※ 6月25日(金)はお休みです。

* 5月21日(金)午前10時から適性テストを行います。

2. パソコンコース

実施時期

6月8日(火)～7月6日(火)

毎週火曜日午後1時00分～3時00分・全5回
*6月1日(火)午後1時から適性テストを行います。

3. 受講料 1,000円(全5回分)
4. 申込方法 実施要項を取り寄せ、申込用紙に記入の上、郵送かファックスで申し込んでください。
〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-13-2

社会福祉法人日本ライトハウス盲人情報文化センター
TEL 06-6441-0015
FAX 06-6441-0039

2004年度

プライベートチーム勉強会のご案内

日時： 2004年4月28日(水)
13:30～15:30
テーマ： I 図・表などの処理
II 情報交換
III プライベート原本依頼 etc.

プライベートチームの勉強会は、4月以降からは、原則として、毎月第4水曜日、1時半から3時半まで行うことになりました。プライベートチームに参加されている方は、日程の調整をよろしくお願いいたします。

この勉強会には盲人情報文化センターのプライベート製作にご協力(または予定)くださる方(グループ)はどなたでも参加できます。

はじめて参加される方がありましたら、事前に、録音製作係の清水か、盤井所長までご連絡ください。

※勉強会の参加費用は無料です。

2004年度 「音訳フォローアップ講座」(全11回)のご案内

橋本勝利先生による「音訳フォローアップ講座」は、これまでどおり第4水曜と第4金曜の午後に実施します。

定員は2コースそれぞれ15名です。この講習会は先着順で受け入れます。定員をオーバーするようであれば、回数を増やすことも検討しますが、できるだけお早めにお申し込みください。

実施時期：2004年5月～2005年3月
毎月第4水、第4金の午後1時～4時
費用 7000円(11回分一括)
申し込み締め切り 5月22日(土)
講師 橋本 勝利 氏

『ろくおん通信』の更新のお願い

『ろくおん通信』の更新月となりました。グループには「お知らせ」を同封しておりますのでよろしくお願い致します。

費用は①郵送費を一律、年間、1000円(部数に関係なく)、②印刷代として、1部年間100円です。

1部の場合は、年間1100円、後は申し込み部数に従って100円づつ増えていきます。5部の場合は、年間1500円、10部の場合は年間2000円になります。

郵便で申し込まれる方は、出来るだけ郵便小為替でお願いいたします。